

第 62 回フランクフルト・ブックフェア

名称	62nd Frankfurt Book Fair
テーマ	アルゼンチン
イベント	約 3,000
会期	2010 年 10 月 6 日 (水) ~ 10 日 (日)
入場時間	9:00 ~ 18:30(最終日のみ 17:30 まで)
会場	Messeelaende Frankfurt am Main(フランクフルト国際見本市会場)
展示面積	171,790㎡
主催	Ausstellungs- und Messe GmbH des Boersenvereins des Deutschen Buchhandels(ドイツ出版社・書籍販売店見本市会社)
出展社数	7,533 社 (ドイツ: 3,315 社、海外: 4,218 社)
パビリオン	75 ブース
参加国	111 カ国
入場者	279,325 人 (前年比 -3.8%) 内訳 6 日 (水)45,871 人 7 日 (木)54,653 人 8 日 (金)49,429 人 9 日 (土)・10 日 (日)129,372 人

報告：梶原 千歳 [(社) 出版文化国際交流会 事務局]

はじめに

この季節のフランクフルトでは珍しく暖かい秋晴れの下、10月6日(水)に第62回フランクフルト・ブックフェアがスタートした。直前の10月3日(日)は、東西ドイツ統一20周年に当たり、街の中心にはご当地グルメやビールのスタンドが並び、普段はしんと静まり返る日曜日でも華やかな一日となった。首都ベルリンでは大規模な祭典が開かれ、その模様はテレビの生中継で見ることができた。本会ではブックフェアと統一20周年を掛け合わせ、ドイツ国内を巡る視察ツアーを企画していたが、催行人数に達さず実施に至れなかったのは残念。

フランクフルトは金融と見本市の街として有名であり、フランクフルト国際空港はドイツ国内最大、ロンドンのヒースロー空港とともにヨーロッパのハブ空港として機能する。市内を歩いてみると街の人種が多様化しているように思う。10月は秋休みに当たり各国からの旅行者が増えることも一因だが、2006年に初めてブックフェアへ訪れた時と比べてもやはり多様化している。フランクフルトはもともと商業都市なので、16、17世紀から多くの移民が流入しており、第2次世界大戦後も好景気を背景に外国人労働者が増加した。市内で行き交う人を見るでもなく見な

がら、ふと、多国籍化する都市と日本の多言語化（することを念頭にすでに国内での多言語出版に取り組んでいる出版社も）の未来をとりとめもなく考えるのであった。

日本の出展

日本からは合計 41 社（共同出展を含める）の出展。本会では 6 号館に日本共同ブースを設置するとともに、国際交流基金との共催にて日本インフォメーション・センターを出展、また本会組織により単独ブース 9 社をまとめた。

[日本インフォメーション・センター]

日本の出版界に関する総合的な情報センター。海外出版関係者からの様々な照会や要望に応えるとともに、“Practical Guide to Publishing in Japan 2010”（本会と国際交流基金の共同発行）や“Japanese Book News”（国際交流基金刊）、日本語学習資料などを提供した。

会期初日から 3 日間はビジネス・デイ、土日は一般公開だが、1 日目は中国からの照会（売り買いとともに、また自社の会社紹介）が目立った。ちなみに、中国パビリオンは日本会場の隣。中国年（昨年テーマ国となった）からの勢いは衰えず、今年も 6 号館で一番大きなパビリオンを構えた。資料や中国語教材も豊富に揃え、書道のワークショップや武道のデモンストレーションなど、一般来場者にもアピールする。

2 日目からは、他国の出版関係者も増え、照会内容に応じてしかるべき出版社を紹介した。土日は、来場者の様相もがらりと変わり、家族連れやコスプレの漫画ファンたちにインターネットで学べる日本語サイトや日本の図書の購入方法などを案内。

[日本共同ブース]

下記出版 4 団体のご協力のもと、各会員社から出展図書を募り日本の学術書や児童書を紹介。多々ある出展社の中でも日本の幅広い専門書を取扱うのはここだけ。また児童書は海外からの注目も特に高い。出版 4 団体の展示社数・点数は下記の通り。

出版粋会	40 社 80 点
自然科学書協会	26 社 52 点
大学出版部協会	28 社 52 点
日本児童図書出版協会	15 社 30 点
計	109 社 214 点

この他、日本共同ブースには、ディスカヴァー 21 が初出展、また岩波書店、鹿嶋国際著作権事務所が参加し、商談の場として利用された。

同ブースでは、国際交流基金の協力のもと、年々高まる来場者の要望に応じて、日本の文化を紹介する英文図書、ポップカルチャーや手芸等の実用書、“Japanese Book News”に掲載された図書を展示した。予想していた通りに反響は高く、購入希望も多数寄せられた。今回、現地書店

との関係も築かれたので来年には販売が実現できそうである。今年は OCS フランクフルトへの注文書を受付、またドイツ以外の来場者にはオンライン書店や当該国の日本書を取扱う書店の紹介を行った。

[単独ブース]

本会の取りまとめにより、下記 9 社が単独出展を行った。

6 号館 日本会場

(株)オーム社

(株)学研マーケティング

(株)講談社

(株)小学館

大日本印刷(株)

リードエグジビションジャパン(株)

(株)日本著作権輸出センター

3 号館 コミック・センター

(株)角川書店

(株)白泉社

日本からの出展社は計 41 社。上記以外には、4 号館の学術・専門書やアートブック会場への参加が目立つ。エージェントも 5 社参加した。

ブースを持たないトレード・ビジターも多く、日本からも版權担当者や編集者、エージェントが多数来場している。日本インフォメーション・センターや共同ブースへは、関係者が度々立ち寄る。日本の関係者間の情報交換の場として更に活用を促進していきたい。そして将来のブース出展や共同ブースへのコーナー出展、日本の出展社の増加に繋がればと思う。

出展社やトレード・ビジターの反応は、様々。経費削減のため出張者を半減し少数精鋭にて臨む社もあれば、国内が不振の今こそ海外に進出するチャンスと各部署に呼び掛け出張者を増強するところも。各社、ホール間の移動時間ももたないと言わんばかりに、通常 15 ～ 20 分刻みでミーティングをセッティングする。中には、これまでは売りの一点張りだったが、今回は時間の空きを設け、他社の作品を見、気に入れば交渉という社も。せっかくのフェアであるし、ブースを訪れることでその出版社の特徴や雰囲気などが効率よく情報収集できる、とのこと。他方、長年出展していたが、今年は成果が上がらなかった、売れる作品も決まってしまったと、来年の出展を再検討する社も。

各社のブックフェアに対する捉え方も様々。現地での交渉ではなく顔合わせを重視する、普段の電話やメールでは不十分な細部の詰めを行う、継続してブース出展するというプレゼンス (= 信頼性に繋がる) に重きを置く、など。世界各国から関係者が集う最大のフェア、日本の出版界としても軽視できない。

[いけばな]

世界各国に支部を持ついけばなインターナショナルのフランクフルト・チャプターにご協力頂き、日本会場をいけばなで彩って頂いた。政府の全面的な支援を受けて出展する中国や韓国のブースに比べ、各社が独自に出展する日本会場に統一感を持たせようと始まった試み。来場者からも高い評価を受けた。

[ブック・アート・インターナショナル]

ドイツのエディトリアル財団主催のもと、世界各国から集められた造本装丁に優れた図書が展示された。日本からは、第44回造本装丁コンクール入賞作品の32点を本会と日本書籍出版協会より提供。ブックフェアでの展示後、来年3月にライブチヒで開催される世界でもっとも美しい本コンクールに出品される。

[視察コース]

本会企画、JTB実施によりフランクフルト・ブックフェア視察コースを企画。「フランクフルト・ブックフェアとイタリア視察コース10日間」に14名の参加があった。ブックフェアへは土曜日に来場、翌日にはゲーテンベルク博物館を視察し、その後イタリアの書店視察や観光となった。例年、募集は5月、締切りは8月。

[現地機関への訪問]

在フランクフルト日本国総領事館、また当地で日本文化や日本語の普及に長年尽力される日本語普及センターを訪問。今後の協力関係の維持をお願いした。

また国際交流基金ケルン日本文化会館より上田浩二館長、松本健志副館長、山口真樹子運営専門員が来場下さり、今後の出展について有意義な意見交換をさせて頂いた。

フランクフルト・ブックフェアのユルゲン・ボース総裁とも毎年会見を持っているが、来年に向けて引き続き日本会場の同配置を要望するとともに、更なる環境整備を申し入れた。本会理事・竹生修己氏、日本書籍出版協会事務局長・樋口清一氏、本会事務局が出席。

テーマ国：アルゼンチン

昨年の中国に引き続き、今年はアルゼンチンがテーマ国に選ばれた。2010年はアルゼンチンにとって建国200周年に当たる。南米がテーマ国を担うのは、1992年のメキシコ、1994年のブラジル以来。ちなみに、テーマ国が設けられるようになったのは1988年から。日本は1990年にテーマ国となっている。

フォーラム館では、アルゼンチンの歴代の作家、激動の歴史、豊かな国土をアピール。世界各国で出版されるアルゼンチンに関する本も多数集められた。5号館には、ナショナル・ブースを設置。出版社100社、作家70名が参加し、“Argentina, culture in motion”をスローガンに300のイベントを開催した。また3号館のコミック・センターでは、アルゼンチン・コミック展が

開かれ、オラシオ・アルトゥナ、エドゥアルド・リッソ、ホセ・ムニョスなどの人気作家の原画が紹介された。市内の美術館でもコミックにフォーカスした展示が行われた。

政府は建国 200 周年を機に、翻訳助成プログラムを開始、現在までに 298 作品が 28 言語 33 カ国で出版された。民間レベルでも自国の文学を紹介する活発な活動が行われている。非営利の TYPА 財団 (Teoria y Practica de las Artes) は、自国の作家、編集者、エージェントの幅広いネットワークを持ち、海外との交流を支援。海外の出版関係者がアルゼンチンの文学作品や出版についてアクセスする際の足がかりとなっている。編集者ウィークと銘打ったプログラムでは、毎年 10 名を招聘。財団設立時の 2002 年は 14 名の応募だったのに対し、今では 80 名近くなった。また当初はやって来る編集者のほとんどがアルゼンチンの作家に関する知識を持ち合わせていなかったが、昨今は最新刊にも詳しく特定の作品を探しに来る編集者が増えたと言う。アルゼンチン文学の特徴として、商業エンターテインメントものが少ないためベストセラーが出にくいことがある。しかし、地道な活動により海外で亜文学の編集者も育ち、ヨーロッパを中心に今後さらに翻訳出版が増加すると思われる。

今年の特徴

8 号館には英語圏の出展社が集うが、経済危機を乗り越え、過去数年の中で一番成果を得られたフェアだと英米を中心にコメントしている。また、世界的なトレンドと言えばデジタル出版だが、フランクフルト・ブックフェアは、今回のフェアで産業の境界を超えたクロスメディア・ネットワークに注目。初の試みとしてデジタルのための新プラットフォーム「ホット・スポット」を設けた。

これは、テクノロジーやデジタル関連会社が出展する展示スペース。出版関係者とのミーティング・ポイントとなる。携帯アプリケーション、コンテンツ・マネージメント、E-Book ディストリビューションから教育ソフトウェアまで、新しいビジネスの展開や探していたソリューションとの出会いを提供する。テーマごとに 6 つのホット・スポットが設置され、商品やサービスの紹介、デモンストレーションが行われた。また、本、映画、テレビ、ゲームなど多岐に亘るメディアやエンターテインメント産業をつなぐ「ストーリー・ドライブ」がフィルム&メディア・フォーラム館にお目見え。ホット・スポット、ストーリー・ドライブともにデジタルの新ビジネスを創造する「フランクフルト・スパーク」という名の下の大プロジェクト。

ドイツ出版概況

期間中、主催者が発行した“ueber:blick, German Book Industry Insight”で掲載されたドイツ出版に関する概況を一部抜粋、ご紹介する。

「年間 10 億冊近い書籍が出版され、これを国民一人当たりになると 12 冊。0 歳児からカウントされていることを加味しても、デジタル化やインターネットの普及が進む中で、決して少ない数字とは言えない。

2008年の総売り上げは96億ユーロ。オンバランスでは、僅かではあるが、出版社や書店は0.4%の対前年比増となった。結果としては事実上、書籍の需要が落ち込むことはなかった。2009年の危機の年でさえも、実際のところ出版界には明らかな下落は見られていない。小売店やデパート、E-commerce という主要な流通チャネルでも良好、全体では2.8%の上昇であった。

とはいえ、全てバラ色とは言えない。マーケットはベストセラーによって牽引されており、上位25位以下はこれまでにない厳しい状況にある。

流通に関しては、産業がすでに変わりつつあると言える。売上が増加したチャネルは、出版社による直販、ドラッグ・ストアやスーパーなどの店舗、オンライン・ビジネスだ。」

下記は2008年の出版統計。

[主要指標]

売上	96.14 億ユーロ
書店	5,000 店
出版社	15,000 社
発行部数	10 億冊
新刊点数	94,276 点
翻訳点数	7,342 点
海外版權販売件数	7,605 件
小売における大手書店チェーン のマーケットシェア	38.6%
出版主要都市	ベルリン、ミュンヘン、 ハンブルグ、シュトゥットガルト

[形態別売上]

ハードカバー	71.1%
ペーパーバック	24.1%
オーディオ・ブック	4.8%

[流通チャネル]

書店	52.6%
デパート	3.0%
メール注文 (含・インターネット)	14.0%
出版社より直販	18.2%
ブック・クラブ	2.9%
その他	9.2%
合計	100%

[分野]

フィクション	32.3%
アドバイス /How to	15.1%
児童書	14.6%
学習書	9.4%
ノン・フィクション	9.3%
旅行	6.5%
科学・医学・IT・工学	5.2%
人文・芸術・音楽	4.7%
社会科学・法律・ビジネス	3.0%

[ドイツ語への翻訳出版]

英語	4,908 点	66.9%
フランス語	847 点	11.5%
イタリア語	211 点	2.9%
スペイン語	193 点	2.6%
オランダ語	165 点	2.3%
スウェーデン語	147 点	2.0%
ロシア語	131 点	1.8%
日本語	105 点	1.4%
トルコ語	87 点	1.2%
ノルウェー語	59 点	0.8%

[海外出版社への著作権の販売]

ポーランド語	10.1%
ロシア語	7.5%
チェコ語	7.3%
中国語	6.8%
英語	6.2%
韓国語	6.0%
イタリア語	6.0%
スペイン語	5.6%
ハンガリー語	4.7%
フランス語	4.6%
その他	31.2%

なお、せっかくフランクフルト・ブックフェアに出展するのだから、ドイツの著作権法についても知りたい、ドイツを視野に入れるいい機会、と日本の出展社の関心が高まっている。詳細は、ドイツ書籍出版協会の下記サイトにて、ご覧頂ける。

<http://bundesrecht.juris.de/urhg/index.html> (ドイツ語)

<http://www.iuscomp.org/gla/statutes/UrhG.htm> (英語)

German Publishers and Booksellers Association

HP: www.boersenverein.de

